兵庫教育大学　教育実践学論集　第15号　2014年３月　pp.79－87

保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題

新　山　順　子*，髙　橋　敏　之**

（平成25年６月18日受付，平成25年12月３日受理）

Research Trends and Issues Related to Body Expression Education in Nursery Teacher Training

NIIYAMA Junko *，TAKAHASHI Toshiyuki **

This study examines the research trend related to body expression education in nursery teacher training. Specifically, it considers the related research results according to three keywords: “improvisation,” “body,” and “teaching practice.” It also clarified some issues in practice and research. From various disquisitions regarding “improvisation” and “body,” we can confirm the importance of “improvisation” and the growing interest in the “body.” In the case of nursery teachers, we can also confirm that these disquisitions are connected to the “body” or to the formation of a new viewpoint known as “embodied knowledge.” In “teaching practice,” research on the understanding and assistance of infants is accumulated with the establishment of the academic domain of “expression.” However, examination into this domain has also revealed the lack of initiative in promoting research on the teaching practice of body expression.

Key Words：body expression, nersery teacher training, body, improvisation, teaching practice

Ⅰ．保育者養成と新しい身体表現教育

本論は，保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向を整理し，実践及び研究上の課題を明らかにするものである。本論では，研究の第一段階として国内の研究を中心に先行研究を俯瞰する。

『幼稚園教育要領』に「表現」領域が制定されて25年が経過した。「表現」領域という名称とその提示する方向性は，保育現場に十分に浸透したと言えよう。改訂においても大幅な変更はないが，制定から四半世紀という節目を迎えて，表現の原点を見直すような動きも見られる。

2008（平成20）年の改訂において新たに加えられた内容は，「感じる」ことや仲間の表現に「触れる」こと，また過程重視の考え方，等である[(1)]。このことは，身体の機能の一部である感覚という原初的なものが表現の起点にあることや，表現を通して他者と交流することに喜びや学びがあることを改めて我々に想起させる。

保育者養成の表現教育においても，自己の身体に気付く，あるいは身体を通して他者とコミュニケーションをする演劇や身体表現の基礎的なレッスンの価値が認められ，次第に授業の中に取り入れられ始めている[(2)]。筆者らは，自由・即興・交流を主たる内容とした身体表現の授業実践について，その教育的価値を検証する研究を行った。これまで養成教育において，身体表現の授業を通して保育者としてふさわしい身体や動きを獲得することの重要性等，身体表現教育に関する幾つかの知見を見出すことができた[(3)]。以上の研究成果は，複数の学問領域に関わる研究であり，さらに研究を推進するためには保育学を中心に，舞踊学，哲学，芸術学，教育学等，幅広い研究を概観した上で課題を整理する必要がある。また，視点によって様々な角度から論じることが可能であるが，本論では特に，筆者らが授業実践の中核とする「即興」，近年保育学の領域で研究が推進されている「身体」，授業研究の実際に迫るため「授業実践（保育者養成・特に身体表現）」という３つのキーワードに絞り込み，関連する研究成果を取り上げて論述する。

Ⅱ．舞踊教育・保育における即興性への着目

１．舞踊教育における即興表現とその研究動向

我が国の学校における舞踊教育は，周知のように，大正から昭和にかけて「遊戯」から「ダンス」へと変遷する。そして，「ダンス」という名称が最初に登場した『学校体育指導要綱』（1947年）以来，ダンス授業では創作を主たる活動として児童・生徒を指導することとなった

*　岡山県立大学（Okayama Prefectual University）
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生（Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education）
**　岡山大学（Okayama University）

[4]。長年，我が国の舞踊教育を牽引した研究者である松本千代栄（1965）は，このことについて「教材を教える指導から創作を引き出す学習としてのダンスの転換」[5]，また「学校ダンス（表現）は，“つくられた教材を教えるもの”という長い伝統から離れて，“つくらせるために教えるもの”という新しい方向に向かった」[6]と述べている。

『学校体育指導要綱』で示された事項は，日本の舞踊教育にとって非常に重要な起点であった。しかしながら，創作への転換は突然に為されたものではなく，その萌芽は昭和初期に遡る。寺山由美（2010）の舞踊教育の創生過程に関する研究によれば，昭和初期の舞踊指導者の著書等から，既成作品を「与える」指導から学習者に創作する余地を与えて学習者から「引き出す」という学習を展開していることが報告されている[7]。このように日本の舞踊教育は，長い実践の積み重ねを経て，創作を主とする内容に到達し，近年は「リズムダンス」等の新しい内容を取り込みながらも，創作的な内容は，変わらずに重点的な内容として位置付けられている。この確固とした創作の価値は「子ども一人一人に必ず個の表現があり，引き出すべきものが子どもの中に内在している」[8]ために他ならないと寺山は述べる。

「即興」という言葉が学校における舞踊教育に初めて登場するのは，1999（平成11）年の『小学校学習指導要領体育編解説』である。「表現運動」領域において，「即興的に踊る」「即興的に表現する」という記述が見られる[9]。これを契機に即興表現は，表現運動・創作ダンス領域の一つの技能として位置付けられていく。村田芳子（1991）は，「即興とは初心者から熟練まで経験に応じてそれぞれの今持っている財産をまるごとぶつけて，「今，ここで，私と，私たちが」ダイナミックに交流するという表現の根源的で大きな幅を持った行為である」[10]と述べ，これまで舞踊教育であまり強調されなかった即興による踊る者同士の交流の価値を指摘した。以後，学校のダンス授業において，踊る者同士が関わりながら即興的に動きを創出する実践と方法の模索が始まる。

舞踊は，文化としての根源的な価値を保ちながら，時代や社会の在り様と共に変化する。美学者の佐々木健一（1995）によれば，即興とは「現在に集中し，心に浮かぶ想いもしくは構想 idea；conception にそのまま従って，それを外に現実化していくこと」[11]であり，確実な成果を求める従前の学校教育には馴染みにくいものであったろう。しかし，20 世紀末からの身体への注目やパフォーミング・アーツ（performing arts）の隆盛，運動の楽しさを重要視する体育科自体の方向性の転換等が，即興表現に価値を与え，表現運動・創作ダンスの新しい授業展開の可能性を拓いた。

舞台芸術の世界でも，1972 年にアメリカ合衆国の舞踊家 S.Paxton が，身体を使った対話形式のダンスであるコンタクト・インプロヴィゼーション（contact improvisation）を考案した。このダンスは，二人一組で「互いに体重をかけ合い，転がったり，途中で止まったり，一緒に崩れ落ちたりする」もので，即興的に動きを創出する[12]。この振付のないダンスの躍動的な新しい動きは，舞踊文化・芸術に大きな影響を与えると共に，全ての人々に可能な自己表現の方法として社会的なダンスとしても広がりを見せる。このような動きも学校のダンス授業に新しい変化を起こす契機となったであろう。

2．保育者と即興性

1990 年代より，保育・教育実践の中でも即興性が重要なものとして論議されるようになる。それは，哲学者・中村雄二郎（1991）が近代科学の知の限界を見据えて実践や経験に価値を置く「臨床の知」という概念を提示した時期にも重なる。「臨床の知」は，宇宙論的な考え方（cosmology），象徴表現の立場（symbolism），身体的行為の重視（performance）で構成され「直感と経験と類推の積み重ね」から成立する[13]。この考え方に基づく場合，実践は分断されず丸ごと捉えられ，「いま・ここ」で起きている事象への取り組みが重要となる。新たな知の枠組みが登場し，保育者や教師の資質にも新たな側面が求められるようになる。その一つが即興性である。

教育学者である佐藤学（1996）は，創造的な熟練教師の特徴を 5 つに整理しているが，その第一に「即興的思考」を挙げている。熟練教師は，初任教師と比較して，自らの実践のビデオ視聴において，「ビデオを停めないで」活発に即興的思考を展開し「豊かに刻々と変化する状況」を語ることができたと報告している[14]。

保育実践では，即興性への着目は思考に留まらない。研究者であり愛育養護学校長として長年保育実践にも携わった津守真（1997）は，「保育者は身体によって子どもとかかわるが，そこには出会うことからはじまって，刻々に変化する行為の中に願いや悩みを読み取り，それに身体で応答する高度の精神作業が含まれている」[15]と述べている。また，保育学研究者である森上史朗（2004）は，「これからの保育者に求められるものは，どのような“出来事”に出会っても，それを創造的に生かすことのできるように，心とからだが開かれていて「意図」や「計画」や「予測」という呪縛から解かれること」[16]であると述べている。これらの論考からは，保育者・身体・即興性について親密な連関を見ることができる。

保育には，保育計画や環境構成は存在するが，小学校以上の教育に必須である教科書（textbook）がないため，思いがけない出来事が起こりうる可能性が大きい。実践自体が即興的であると言えよう。保育者は、常に出来事に対して即興的に対処する身体や動きを身に付けておく

べきであろう。しかし，保育者養成教育で以上の点を考慮して，カリキュラムや授業内容を見直す動きは未だない。幼稚園教育実習や保育実習で保育現場に出た学生は，「もっと臨機応変に動けるように」と担任保育者から助言を受けて帰学する。

以上，舞踊教育と保育における即興性への着目について見てきた。筆者らの実践及び研究の独創性は，保育実践の現場で重要性が認識されつつある保育者の身体や動きの即興性とその育成について，既に蓄積のある舞踊教育の方法論を保育者養成に活用することにある。その妥当性については，さらに先行研究の検討を進めて論考を深める必要がある。引き続き，「身体」や「授業実践」に関する先行研究を俯瞰する。

Ⅲ．現代社会における身体の在り方と保育者の身体

１．現代社会と身体

身体は，人間存在の基盤であるため，身体に関する思索や研究は，様々な学問領域から多数見付けられる。それらは，個々の学問領域に留まらず，身体をキーワードとして，幾つかの学問領域を連結したり越境したりしながら，無尽に展開されている。筆者らは，2003 年に発表した論考[17]の一部において，身体に関する考察を行っているが，本論ではその考察をさらに発展させて，まずは現代社会における身体の在り方を前提に，コミュニケーション，芸術，特に舞踊・演劇に関する論考を幾つか取り上げて概観する。

身体と世界の関わりから人間存在というものを現象学の手法で解明した M.Merleau-Ponty（1945）は，「私は私の身体によってこそ他者を了解する」と述べているように，身体に閉じ込められた人間の不自由さを理解しながらも，「自己を開陳」する身体の自由と創造性に着目した[18]。従来陥りがちな「触れる」ものの優位性を覆し，「触れる」と「触れられる」は同等であるという思索も興味深い。Merleau-Ponty の著作は，我が国の様々な学問領域の研究者に影響を及ぼし，今日でも保育や看護における他者との身体を介したコミュニケーションに関する研究では頻繁に重要文献として引用されている。

Merleau-Ponty に影響を受けて身体論を展開した哲学者の一人に鷲田清一（1998）がいる。著書『悲鳴をあげる身体』では，自分への攻撃的なピアシング（piercing）等の身体加工，拒食，過食が増加している身体の現況を捉え「身体の深い能力，とりわけ身体に深く浸透している知恵や想像力，それが伝わらなくなっているのではないか」[19]と問題提起する。また，同時期に臨床哲学という新しい学問領域を設定し，その中心に「聴く」という行為を据え，現実の世界と哲学を接近させる論考を試みている[20]。

「胎児は母胎と〈共生〉していると同時に〈身分け〉〈身二つとなる直前にある〉」[21]等、日本語の「身」を駆使した身体論で著名な哲学者の市川浩（2001）には，身体に関する多数の論考が存在する。市川の思索の領域は幅広く，演劇的思考に関する論考では，「近•現代演劇が次々に切り捨ててきた神，コロス，観客，対話，モノローグ等の演劇にとっての不可欠な諸要素，つまりは他者性と身体性の根源を成すもの」[22]に我々を再注目させた。

舞踊学者の M.Doubler（1940）は，自意識によって自身の表現から切り離されている現代人の状況を「彼らは身体を，負担であり，ほとんど統制できない道具であると感じる」と指摘する。そのような中で，「舞踊は不必要な束縛から身体を自由にし，必須ではない自制の幾つかを打破することによって，より広い，より満ち足りた生活のために個性を解放する」[23]と舞踊の価値を高く評価している。

批評家の三浦雅士（1994）は，現代をあらゆる身体のタブーから解放され純粋に身体に向き合う「身体の零度」と位置付ける。三浦は，身体が単なる身体であり，だからこそ貴重であると考えられるようになった背景や意味を，近代に遡りながら緻密に探る。20 世紀になり爆発的な展開を見せた舞踊は，「身体の零度」の確立に重要な意味を持つ。舞踊は，「身体を基軸に，人間のすべてを考察できる」ものとなり，「農耕民の舞踊も遊牧民の舞踊も取り込みながら，それらのすべて，精神と身体のすべてを考える場に変容した」[24]と述べている。

美学・芸術学研究者である尼ケ崎彬（1996）は，「身体芸術としての舞踊は，基本的に身体の新しい秩序を提示するものである」と述べ，日本の舞踊と西欧の舞踊を身体の秩序という視点で比較した。西欧の舞踊は何らかの秩序を身体に与えることを課題とするが，我が国では暗黒舞踏系に代表されるように「意識的に脱秩序化を行おうとする」と述べている[25]。これについて尼ケ崎は，意味を剥奪し構造を逸脱するところに美や真実を見出そうとしてきた日本の文化的伝統と関係があるかもしれないという仮説を提示しており興味深い。

現代に生きる我々は，半世紀前までに体験していた生活とは大きく異なる身体の現況の中で生きている。文化人類学者の波平恵美子（2005）によれば，かつて人間は母親にしっかりと抱かれる等，家族を中心とした親密な身体行為により，自分の身体への意識を保持したり，他の人の身体と自分の身体は違うことを自然に認識できていたと言う。波平の著作には，身体感覚が乏しい最近の子どもの事例として，インターネット上で交わされた会話に激高した小学生が，相手に表現を撤回してもらいたいという欲求を伝えることもしないで，相手の身体に徹底的なダメージを与えたという事例が報告されている[26]。人間関係を結べない閉じた身体の有り様，特に子どものそのような状況に非常に危機感を覚える。

以上のような現代社会の閉塞した身体の現況に対して，本論で取り上げた論考は，身体への着眼点は様々であるが，それらを解放する可能性のあるものとして始原的な行為や芸術，とりわけ舞踊や演劇の重要性を読み取ることができる。また，社会や文化が投影される身体というものの象徴性や意味を改めて確認することができる。

2．保育者の身体

ここでは，教育・保育学の立場から，教師や保育者の身体に言及した論考を概観する。まず，教育学の立場から，教師としての身体についての研究成果を見てみよう。佐藤学（1996）は，教師や子どもの身体や言葉を視点として授業の見直しを図る中で「プログラム化された教師の身体」の問題を提示している。このような身体で授業が進行される教室では「子どもの身体も硬直し生命体としての活力を喪失している」と述べ，これを打開するために「出来事に開かれた身体」を求めている[27]。

演劇の研究所を主宰し教育大学で研究・教育にも従事した演出家・竹内敏晴（1999）も同様に制度化された教師の身体の問題を指摘している。相手を見付けて並ぶというレッスンで一列縦隊に整然と並ぶ教師の事例を挙げて，それは人を「物」として扱う効率的な方法であり，「自分のからださえ客体として扱うしかできなくなっている」教師の身体性に危機感を募らせている[28]。

現代日本人の身体感覚の再生を目指す「身体感覚の技化（わざか）」等，独自の論を展開している斉藤孝（2000）は，教師の身体を考える際に重要なのは「自然体」と「レスポンスする身体」であると述べている。「自然体」とはただ普通にしているということではなく，「地に足がついていて軸はしっかりとしていて，一方で肩の力は抜けていて状況に臨機応変に対応できる構え」である。また，応答（response）する身体については「子どもが話しかけたり笑いかけたりしたときに応答（レスポンス）できない身体であれば教師の資格はない」と述べ，教育はレスポンスの膨大な蓄積によってなされるもので，その基本をなすのは教師のレスポンスする身体であると述べている[29]。

西洋子（2001）の研究では，「柔らかなからだ」を保育者の専門性の1つとして位置付け，現職保育者が身体表現のワークショップを受講することで保育者として成長を遂げていく経過が報告されている。「柔らかなからだ」とは，「他者や外界に開かれており周囲の人と響き合うことができる身体」であり，「柔らかさ」は子どもとの関係性の中での共振や共有の受容の質の「柔らかさ」であると述べる[30]。このような身体を獲得することで，保育者は子どもと豊かに響き合い共感し合う優しいコミュニケーションの世界を生成することができる。以上の研究は，保育者の専門性としての身体の在り方を提示しており，先述の津守が実践の省察から述べた「保育者は身体によって子どもとかかわる」[31]と言うことの強い裏付けとなっている。筆者らが目指している新しい身体表現教育構築に関連する先駆的な研究として重要であり，養成期に多少でも「柔らかなからだ」に近付くためには，どのような教育が必要かと言う課題を見出すことができる。

以上の先行研究からは，学校や教育という制度の中で硬直化した身体の問題が指摘される一方で，最近の研究では，子どもとの関わりに対して優れた応答・共振・受容等の能力を持つ，教師・保育者の身体が求められ議論されていることが確認できる。

3．保育実践と身体知

保育学の領域で，身体や動きの重要性は，特に発達理論において従来より多くの研究者から指摘されている。しかし，保育実践における子どもや保育者の身体の在り方が本格的に研究され始めたのは近年のことである。その背景には，J.J.Gibson（1979）による生態学的心理学からの新しい概念の提示がある[32]。この新しい概念は，Gibsonの造語で「アフォーダンス」（affordance）と呼ばれる。「アフォーダンス」とは，佐々木正人（1994）によれば，環境が人に与える価値ある情報であり，環境の中にある物がそれを見ている人に提供する行為可能性についての情報である[33]。この考え方に基づく場合，我々は「アフォーダンス」を知覚するために身体を通して環境と接触していることになる。

以上のような理論を基盤として，無藤隆（1996）は，環境との関連性から保育実践における身体の在り方に着目した。無藤は「幼児を対象とする保育の根底には多様な動きを可能にするということがあり，そのための場が幼稚園の環境であり，保育はそれを環境設定を通して援助すること」[34]であると述べ，「身体知」の獲得としての保育という新しい視点を提示した。

その後，研究者らの身体への関心は高まり，榎沢良彦（1997）の幼児と保育者の行動観察から身体の在り方を考察する研究や，森司朗（1999）の幼児の身体の共振に着目した研究等が報告されている[35][36]。

最近では，保育者に限定して身体知に着目した研究も報告されている。草信和世・諏訪きぬ（2009）は，乳児と保育者の相互作用を捉え，保育者の暗黙知である身体知を記述してその身体知の特質を分析・考察した[37]。また幼児が遊びの中で行う身体接触について先行研究が用いた分類を基に観察・分析し，身体知の視点からその意味を考察した藤田清澄（2011）の研究は発展的研究と言えるだろう[38]。

Ⅳ．保育者養成における身体表現の授業実践研究

１．保育内容「表現」と身体表現の位置付け

授業実践研究の整理の前に，「表現」領域と身体表現の位置付け及び幼児の身体表現に関連する研究の動向について整理する。

我が国の保育内容の変遷の中で領域が示されたのは，1956（昭和 31）年の『幼稚園教育要領』からである。このときの領域は，「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の 6 領域であった。小学校の教科を連想させるこれらの領域名称は，誤解を生じやすく，次第に小学校の準備教育として幼児教育を捉える傾向が出てきた。1964（昭和 39）年には，より幼児期の発達の特性を踏まえ幼児教育の重要性を明確化したものに改訂されたが，領域名称はそのままであった[39]。その後 25 年を経過して，幼児を取り巻く環境が大きく変化したことを契機に，1989（平成元）年に大幅な見直しが行われた[40]。幼児期の教育は，環境を通して行うものであるという基本的な考えのもと，新しく制定されたのが「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域である。以上の領域は，心身の健康，人とのかかわり，自然や身近な環境とのかかわり，言葉の獲得，感性と表現，という幼児の発達の側面から纏められ，発達に必要な経験が内容として記述された。その後 1998（平成 10）年と 2008（平成 20）年に改訂されたが，領域名称に関わるような大きな変更はない[41][42]。

2008（平成 20）年告示の「表現」領域は，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」と明記されている。ねらいと内容の記述の抜粋を**資料 1** に示したので，詳しく見てみよう。

本論に直結する身体や動きの表現に関連する内容については，内容の(1)(4)(8)に明確に示されているが，その他にも「感じる」「伝え合う」「考える」「描く」「作る」「歌う」「楽器を使う」等，種々の行為が示され，幼児の生き生きとした身体や動きが幼児期に経験させたい表現の基盤になっていることが理解できる。幼児の表現は，言語，音楽，造形，身体等の表現が，遊びや生活の中で総合的に見られるものであることは疑う余地はないが，あらゆる表現を支える身体や動きを媒体とする身体表現は特に重要であり，着目して取り上げることには意味があると考える。

また，以上に示された内容を援助する保育者の役割は，大変重要である。保育者は幼児の経験や発達の状況を見極めた上で各々の「自分なりの表現」を受容し，自由な表現を創出できるように，適切な環境を整えなければならない。「自分なりの表現」とは，どのようなものであろうか。野波健彦（1999）によれば，この文言には，「自分に合った表現方法を選んで表現する子ども」「自分で感じたり考えたことを思いのままに表現する子ども」「自分の表現と同じ表現に出会って共感し自信をもったり，あるいは自分の表現と違う表現に出会ってそれらを受け止め受け入れることができる子ども」に成長してほしいという期待が込められていると言う[43]。

資料 1　「表現」領域のねらいと内容の記述

1　ねらい　(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感受性をもつ。／ (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。／ (3) 生活の中でイメージを豊かにし，様々な表現を楽しむ。

2　内容　(1) 生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ。／ (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ，イメージを豊かにする。／ (3) 様々な出来事の中で，感動したことを伝え合う楽しさを味わう。／ (4) 感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりする。／ (5) いろいろな素材に親しみ，工夫して遊ぶ。／ (6) 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。／ (7) かいたり，つくったりすることを楽しみ，遊びに使ったり，飾ったりなどする。／ (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

表現に向かう契機・過程・到達点は，一人一人異なる。「自分なりの表現」を実現させるためには，幼児への関わりに高度な専門性が必要であり，それ故に遊びの展開や指導・援助の困難さが従来より指摘されてきた領域でもある[44]。

２．幼児の身体表現と保育者の関わりに関する研究動向

幼児の身体表現と保育者の関わりに関する研究成果を見てみよう。限定された範囲ではあるが，幼児の表現や舞踊，遊びに関する研究論文の掲載について定評のある『保育学研究』『乳幼児教育学研究』『舞踊学』『幼少児健康教育研究』（1996 年から 2012 年の 17 年間分）を中心に見直し，整理する。

古市久子（1996）は，身体表現の「豊かさ」の概念を明らかにするために，保育者が「豊かである」と感じた身体表現の場面の分析を試みた[45]。エピソードの分類から，7 つの要因が導き出されており，研究成果は幼児の動きの評価や目標設定等に活用できる。

名須川知子（1998）は，幼児の音楽表現における身体の動きに注目した。具体的な実践事例の検討により，音楽と動きが融合したものが幼児の実際の音楽活動に最も近い等の貴重な知見を得ている[46]。また名須川は，幼児期にふさわしい「表現」領域構築の手掛かりを得るために，唱歌遊戯作品に見られる身体表現とリズムの史的変遷についても論述している[47]。

西洋子・本山益子（1998）は，幼児にある題材を与えて自由に身体表現を行わせた場合，高い確率で社会化の過程で獲得した「定型的な表現」を行うと報告してい

る。「定型的な表現」とは，例えば「花」という題材であれば手指で花が開くような一般化した動きをすることを言う。彼らは，この研究を継続した形で，幼児の表現の題材に関する認識と実際の身体表現との関連性についても，幼児への聞き取り調査をもとに分析・考察している[48][49]。

金子直子・松本富子・鈴木武文（1998）は，5歳児を対象に身体表現を行わせ，その特徴を作成した評価項目によって明らかにすると共に，運動能力・創造的能力が幼児の身体表現にどのように関わっているかについて報告した[50]。

新山順子（1999）は，3～5歳の幼児に指定した題材の身体表現を自由に行わせ，出現した動きを運動単位で数量的に捉えて，動きと題材の関係を発達的に分析した[51]。また，イメージと動きの関係については，事例による質的な方法で分析を行っている[52]。

鈴木裕子・西洋子・本山益子・吉川京子（2002）は，幼児の身体表現遊びにおけるイメージと動きが循環するための活動内容や方法，またその際の援助を具体化する研究を行った。実験を通しての実証と実際の保育現場での事例検討という2つの手法により，幼児の身体表現の特性から導き出した援助の視点を明らかにしている[53]。

幼児の表現教育では，「感受性」や「感性」等に価値が置かれているが，文言としては抽象的で具体性に乏しい。最近では，この点に焦点を当てた研究も見られる。以下の研究は，身体表現に限定するものではないが，身体表現にも関連・包括する研究であるため取り上げる。

小池美智子（2009）は，保育者の音楽的感受性を幼児の「自分なりの表現」を支える重要な要因として取り上げ，保育者の感受性のどのような側面が幼児の音楽的な表現へ影響を与えるのかということを検討した[54]。

鈴木裕子（2009）は，「表現」領域で強調される感性という文言に着目し，感性の実態に接近する。幼児期の感性尺度の開発に着手し，幼児の感性を具体化することを試みている[55]。

以上の先行研究から，1989（平成元）年の「表現」領域制定以降，幼児の身体表現や保育者の関わりに関する研究は，幼児理解あるいは具体的な援助や評価の指標を求めて，研究がかなり推進され成果が蓄積されていることが確認できる。

3．保育者養成における身体表現の授業実践の研究動向

保育者養成における身体表現の授業研究の動向を整理するにあたり，限定された範囲ではあるが，保育学・教師教育学・舞踊学の領域の主要な学会誌である『保育学研究』『日本教師教育学会年報』『舞踊学』を見直し（1996年から2012年の17年間分），該当論文を抽出した。その結果，保育者養成における授業研究の論文は7件であった。そのうち，表現領域に関するものは以下の2件で，何れも身体表現に関する論考であった[56]。

新山順子・髙橋敏之（2003）は，保育者としてふさわしい身体を養成するための身体表現の授業実践研究を行った。保育者養成校における身体表現の授業を受講生の内省をもとに分析し，多様な表現の試みにより受講生が新しい身体的な気づきを得ることを報告した[57]。

西洋子・野口晴子（2005）の研究では，「保育者としての身体的感性」を育成することを目指して，身体表現の「共振」に着目した実践と分析を行っている。これまであまり意識されていなかった「共振」への着目により，身体表現の新たな可能性を見出している点に独自性がある[58]。筆者らの研究では，「即興」に着目して授業実践研究を進めているが，西・野口（2005）の研究の授業内容を見ると，即興的な動きの要素も含まれているように見受けられる。重要な先行研究として，この研究で提示された知見は注目すべきである。

小林美実（2002）は，「表現」領域の制定から15年を経た時点で「領域『表現』によって起きた表現に関する関心，議論，研究は，まだ実際の保育や教育を変えるには至っていない」[59]と述べているが，それから10年を経た現在も保育者養成の授業に関しては，研究が十分になされているとは言い難い。

教員養成という枠組みではあるが，大橋奈希左・廣兼志保（2011）による体育科「表現運動」の授業研究を近接的な研究として取り上げる[60]。この研究では，身体コミュニケーションの育成を試みる授業実践とその評価について分析を行っている。その他，大学における授業実践研究としては，教養教育の授業において即興表現を実践し，その効果を報告した中野優子・岡田猛（2012）の研究がある[61]。専門課程で即興表現を学ぶ機会のない大学生にとって「創造性を涵養する基礎的な教養教育の重要な機会」であるとして，授業を受講した学生の心理的変容を詳細に分析・報告しており興味深い。

以上の研究は，身体表現の特性を捉え直し，具体的な実践データの分析により，その教育的意義を論述した研究として非常に貴重である。しかし，前述の幼児の身体表現の研究に比較すると，研究数が格段に少なく，未だ研究途上と言える。最近の専門職への関心の高さを考慮すると，研究の推進が望まれる分野である。

Ⅴ．保育者養成における身体表現教育の総括と課題

本論では，保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向を，特に「即興」「身体」「授業実践（保育者養成・特に身体表現）」という3つのキーワードに基づいて関連する研究成果を整理した。これまで述べてきたことを以下に総括する。

第一に，「即興」に関しては，日本の舞踊教育の歴史

から，創作的な内容を重視している方向性とその基盤の上に即興表現が技能として加わり，新しい授業展開の可能性が拓かれたことが確認された。一方，保育実践においても，著名な研究者から即興性が重要なものとして指摘され認知され始めていることが判明した。

第二に，「身体」に関しては，様々な身体に関する研究から，現代社会の閉塞した身体の現況，そしてそれらを解放する可能性のあるものとして，舞踊や演劇の重要性を読み取ることができた。また，社会や文化が投影される身体というものの象徴性や意味を改めて確認することができた。身体への関心の高まりは，保育者としてどのような身体が相応しいかと言う論考や身体知という新しい視点による保育学研究の展開にも繋がっている。

第三に，「授業実践（保育者養成・特に身体表現）」に関しては，まず『幼稚園教育要領』における身体表現の位置付けを確認し，幼児の身体表現と保育者の関わりに関する研究を整理した。これらの研究は，「表現」領域の制定を契機に，幼児理解あるいは具体的な援助や評価の指標を求めて，研究が推進され成果が蓄積されていた。身体表現の授業実践については，幼児の身体表現の研究に比較すると，未だ研究が少なく，専門職への社会的な関心の高さを考慮すると，喫緊に研究の推進が求められる。

身体表現の授業実践研究が少ない理由としては，研究者と実践者が同一であり，データの収集が難しいということが挙げられる。ビデオ機器の利用や受講者である学生の内省の効率的な収集，複数名による観察が可能になる共同研究の体制整備等，研究方法や研究形態に工夫をしていく必要もあるだろう。

本論で整理した先行研究の概観を踏まえて，保育者養成における身体表現の実践及び研究において取り組むべき課題を，以下に述べる。まず，現在蓄積されつつある身体そのものや他者との関わりに由来する身体表現の特性に着目した研究（例えば，即興性，共振，身体コミュニケーション等）をさらに進める。これらは，多様な身体表現の文化から「保育者養成にふさわしい身体表現とは何か」という根本的な命題の解決と身体表現の可能性を探るために重要な研究である。

次に，限られた保育者養成カリキュラムの中で「何をどのように教えるか」という内容と方法の精査を行う研究が必要である。つまり，90 分× 15 回の授業をどのように組み立てるかということである。これらの研究では，例えば教員として最小限必要な資質能力を示した「教員養成スタンダード」[62] の研究の考え方と同様に，保育者としてこれだけは身に付けさせたい事項を身体表現の領域に関して明確化する必要があるだろう。現代の保育の方向性も当然加味しなければならない。最近では，障害児への保育の関心が高まっているが，保育者養成の身体表現の授業で，障害児を想定した具体的な保育内容の提示や援助は，未だ本格的な実践・研究には至っていない。

最後に，主に 1990 年代から蓄積された幼児の身体表現の研究で得られた多くの知見を活用して実践・研究を行い，養成教育の成果が保育実践においても有用であるという視点を維持することである。保育者養成校の教員は，学生が将来保育者となり，彼らが幼児に身体表現を援助している姿を想起しながら授業を行うべきであろう。そして，彼らと共にある幼児が生き生きと身体表現をしている姿を忘れてはならない。そこから乖離し過ぎると，養成教育と保育実践が円滑に繋がらない。

筆者らは，以上の課題を見据えて，保育者養成における新しい身体表現教育を構築するために，今後も実践と研究を継続する予定である。

―文　献―

(1) 文部科学省・厚生労働省『平成 20 年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針〈原本〉』チャイルド本社，2008（※『保育所保育指針』は『幼稚園教育要領』に準じて改訂を行っているため，本研究では主に『幼稚園教育要領』を考察の対象として使用した。）

(2) 小林美実「幼児の表現、その考え方と教育法」『保育学研究』41(1) 日本保育学会，pp.109-112，2002

(3) 新山順子・髙橋敏之「保育者としてふさわしい身体を養成する身体表現の可能性とその実践」『保育学研究』41(2) 日本保育学会，pp.16-23，2003

(4) 文部省『学校体育指導要綱』，1947
http://www.nier.go.jp/guideline/s22ejp/（2013.5.13 閲覧）
全文は以上の URL に掲載されたものを参照した。

(5) 松本千代栄「現行の学校ダンスはこれでよいのか」『学校体育』18(11) 日本体育社，pp.40-45，1965

(6) 松本千代栄「学校体育におけるダンス表現運動の指導はいかにあるべきか」『体育科教育学研究』日本体育科 教育学会，pp.11-20，1984

(7) 寺山由美「創作を主とする舞踊教育の生成過程」『舞踊教育学研究』(12) 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会，pp.5-18，2010

(8) 前掲書 (7)，p.14

(9) 文部省『小学校学習指導要領解説体育編』東山書房，1999

(10) 村田芳子「われわれの時代にとって舞踊とは何か」舞踊教育研究会編『舞踊学概論』，p.16，1991

(11) 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会，p.63，1995

(12) Novack,C.J.　立木燁子・菊池淳子訳『コンタクト・インプロヴィゼーション―交感する身体』フィルムアート　社，p.16，2000（Novack,C.J.*Sharing the dance:Contact*

Improvisation and American Culture, The University of Wisconsin Press, 1990）
(13) 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書，pp.125-140，1991
(14) 稲垣忠彦，佐藤学『授業研究入門』岩波書店，pp.104-112，1996
(15) 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房，p.288，1997
(16) 森上史朗「カンファレンスによって保育を開く」『発達』(68) ミネルヴァ書房，p.2，2004
(17) 前掲書 (3)，p.17
(18) Merleau-Ponty,M.　竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房，p.305，1967（Merleau-Ponty, M.*La Phenomenologic de la Perception* , Galimard，Paris，p.216，1945）
(19) 鷲田清一『悲鳴をあげる身体』PHP 新書，p.4，1998
(20) 鷲田清一『聴くことの力―臨床哲学試論』TBS ブリタニカ，1999
(21) 市川浩『身体論集成 [中村雄二郎編]』岩波現代文庫，p.3，2001
(22) 前掲書 (21)，p.385
(23) Doubler,M.N.H.　松本千代栄訳『舞踊学原論』大修館書店，p.169，1974（Doubler, M.N.H. *Dance, A Creative Art Experience*，Appleton Century Crofits Inc., New York，p.163，1940）
(24) 三浦雅士『身体の零度』講談社選書，pp.267-268，1994
(25) 尼ケ崎彬「身体と芸術」井上俊他編集『身体と間身体の社会学』岩波講座現代社会学 4，岩波書店，pp.155-162，1996
(26) 波平恵美子『からだの文化人類学』大修館書店，pp.30-55，2005
(27) 前掲書 (14)，pp.81-86
(28) 竹内敏晴『教師のためのからだとことば考』ちくま学芸文庫，p.32，1999
(29) 斉藤孝「今こそ求められる教師の身体観」『体育科教育』10 月号大修館書店，pp.10-13，2000
(30) 西洋子「保育者の身体性」『保育学研究』39(1) 日本保育学会，pp.12-19，2001
(31) 前掲書 (15)，p.288
(32) Gibson,J.J.　古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻共訳『生態学的視覚論』サイエンス社, 1985（Gibson,J.J.*The echological approach to visual perception*，Houghton Mifflin，1979 ）
(33) 佐々木正人『アフォーダンス―新しい認知の理論』岩波書店，1994
(34) 無藤隆「身体知の獲得としての保育」『保育学研究』34(2) 日本保育学会，pp.8-15，1996
(35) 榎沢良彦「園生活における身体の在り方―主体身体の視座からの子どもと保育者の行動の観察」『保育学研究』35(2) 日本保育学会，pp.38-45，1997
(36) 森司朗「幼児の「からだ」の共振に関して―対人関係的自己の観点から―」『保育学研究』37(2) 日本保育学会，pp.24-30，1999
(37) 草信和世，諏訪きぬ「現代における保育者の専門性に関する考察―子どもと響き合う保育者の身体知を求めて―」『保育学研究』47(2) 日本保育学会，pp.82-91，2009
(38) 藤田清澄「遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味」『保育学研究』49(1) 日本保育学会，pp.29-39，2011
(39) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979（『幼稚園教育要領』1956，1964 の全文については上記の文献の巻末資料を参照した。）
(40) 文部省『幼稚園教育要領』フレーベル館，1989
(41) 文部省『幼稚園教育要領』大蔵省印刷局，1998
(42) 前掲書 (1)，pp.9-25
(43) 野波健彦「「自分なりの表現」のとらえ方」小田豊・神長美津子編『Ｑ＆Ａでわかる新・幼稚園教育要領』ひかりのくに，pp.124-125，1999
(44) 鈴木裕子，西洋子，本山益子，吉川京子「幼児期における身体表現の特徴と援助の視点」『舞踊学』(25) 舞踊学会，p.23，2002
(45) 古市久子「幼児の身体表現における「豊かさ」の概念について」『保育学研究』34(2) 日本保育学会，pp.24-32，1996
(46) 名須川知子「幼児の音楽表現における身体の動きの意味」『保育学研究』36(1) 日本保育学会，pp.52-58，1998
(47) 名須川知子「遊戯作品にみられる動きのリズムの変遷に関する研究」『保育学研究』40(2) 日本保育学会，pp.245-251，2002
(48) 西洋子，本山益子「幼児期の身体表現の特性Ⅰ―動きの特性と働きかけによる変化―」『保育学研究』36(2) 日本保育学会，pp.25-37，1998
(49) 本山益子，西洋子「幼児期の身体表現の特性Ⅱ―身体表現と認識との関連―」『舞踊学』(23) 舞踊学会，pp.53-64，2000
(50) 金子直子，松本富子，鈴木武文「5 ～ 6 歳児における身体表現の特徴と感覚運動能力・創造的能力との関係について」『舞踊学』(21) 舞踊学会，pp.14-20，1998
(51) 新山順子「幼児の身体表現におけるテーマと動きの関係」『幼少児健康教育研究』8(1) 日本幼小児健康教育学会，pp.21-29，1999
(52) 新山順子「幼児の身体表現におけるイメージと動きの関係」『岡山県立大学短期大学部紀要』7，pp.53-63，

2000
(53) 前掲書 (44)，pp.23-31
(54) 小池美知子「保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響」『保育学研究』47(2) 日本保育学会，pp.60-69，2009
(55) 鈴木裕子「幼児の感性を具体化する試み―幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして―」『保育学研究』47(2) 日本保育学会，pp.28-38，2009
(56) 該当する研究は，以下の 7 件（発表年順）である。
①志賀智江「教育実習生の幼児理解を支援・評価する「場面提示法」の開発」『日本教師教育学会年報』(6) 日本教師教育学会，pp.134-151，1997
②佐藤喜代，小田豊「保育者養成における反省的実践「園作りプロジェクト」」『保育学研究』38(2) 日本保育学会，pp.78-86，2000
③佐伯一弥，箙光夫「保育者養成課程における事例検討の在り方と手続きに関する一考察―教科目「総合演習」の実践を振り返って―」『保育学研究』39(1) 日本保育学会，pp.36-43，2001
④岩立京子，竹田小百合「幼児や幼稚園教員に対するイメージの変容に及ぼす幼児教育心理学の授業の効果」『保育学研究』39(1) 日本保育学会，pp.52-60，2001
⑤前掲書 (3)，pp.16-23
⑥西洋子，野口晴子「保育者としての身体的感性を育てる教育―授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化―」『保育学研究』43(2) 日本保育学会，pp.42-51，2005
⑦池田政子，高野牧子，阿部真美子，沢登芙美子，池田光裕「ジェンダーに向き合う保育専門職の養成」『保育学研究』43(2) 日本保育学会，pp.131-141，2005
(57) 前掲書 (3)，pp.16-23
(58) 前掲書 (56) ⑥，pp.42-51
(59) 前掲書 (2)，p.112
(60) 大橋奈希左，廣兼志保「教員養成における身体コミュニケーション力育成のための実践的研究―学習者の相互評価を目指して―」『舞踊教育学研究』(13) 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会，pp.21-29，2011
(61) 中野優子，岡田猛「即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果」『舞踊学』(35) 舞踊学会，pp.53-64，2012
(62) 別惣淳二，鈴木篤，龍和飛鳥，渡邊隆信，大関達也，藤原賢二「小学校教員養成スタンダードに関する開発的研究―大学卒業時における「教員としての最小限必要な資質能力」の同定と構造化―」『教育実践学論集』(13) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科，pp.25-35，2012

―図　版―

資料 1　文部科学省・厚生労働省『平成 20 年告示幼稚園教育要領•保育所保育指針〈原本〉』チャイルド本社，pp.23-24，2008

附記：本論は，平成 25 年度岡山県立大学特別研究費（独創的研究）の助成を受けた研究成果の一部である。